主　旨　説　明

大　塚　雄　作（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

（大塚）　こんにちは。今、ご紹介いただきました大塚です。

林先生が紹介されたことが何のことだか分からないかたもいらっしゃるのではないかと思いますけれども、昨年９月までは大学評価・学位授与機構におりまして、大学評価・学位授与機構の評価を４年間、経験してまいりました。ですから、そういう意味では本当に、評価する側の論理といいますか、思いというのがあります。大学評価に携わってきて、我々は大学を上から評価するという気持ちは全くなく、一つ一つの大学にどんどんよくなってもらえればという思いがあったのですけれども、やはり説明会の中などで、それがなかなか伝わらないという困惑をしばしば感じておりました。

大学評価が導入された最初のころは、「こんな評価、本当に必要なのか」というそもそも論が、機構の委員会でも随分出されておりました。しかし、最近では、今、尾池総長からもありましたように、グランドデザインでも質の保証に関わる評価はもとより、私がびっくりしましたのは、高等教育に注ぎ込む予算を今の1.5倍にしなければいけないのだ、というような言い方がしてありまして、それだけにアカウンタビリティがますます問われる時代になりつつあるということを実感しております。評価は、それだけ、我々の教育や研究そのものにも密接に結びついているという位置づけは、今やもう動かしようのない状況になっているのだと思います。

私も、昨年10月から京都大学に参りまして、さっそくいろいろな評価関係の委員会に顔を出させていただいておりますけれども、そのような中でのやりとりの一部を目の当たりにしますと、それぞれの大学の末端には、まだ４～５年前の大学評価が始まった頃と同じような議論のレベルにあるのかなといった雰囲気を感じたりすることがあります。そういう意味では、説明会に参加されていた先生方は、評価についてはまだ進んでいたのだなと思ったりもすることもあるわけであります。

そういうギャップをいろいろと経験したり感じたりしてまいりましたので、日本の中でこれから大学評価が育っていくためには、また、その評価を健全に大学の向上に結びつけていくためには、評価する側と大学がコミュニケーションを密にして、お互いの思いをぶつけ合い、評価を有効に利用していくための考え方を共有していく場が必要不可欠だろうと思います。

今回は、大学評価に携わっている方々にお集まりいただいて話題提供をしていただきますけれども、あくまで大学評価の方法の説明会ではないということで、もちろん基本的な方法を簡単にご説明いただかなければいけないということもあると思いますが、評価の背景にある、それこそ評価の思いといったようなものを、評価を担当されてのご苦労なども交えながらご紹介していただければと思います。また、討論の時間がどれだけ取れるか分かりませんが、皆さんがたからは、恐らく評価などあまり考えたこともないというかたもいらっしゃるのではないかと思いますし、評価に対する大学側からの思いを率直にぶつけていただいて、今後の評価が日本の中で健全に位置づくような方向性をここで探っていくことができればと思っておりますので、どうぞフロアからも積極的なご討論をお願いいたします。

簡単ではございますけれども、以上で主旨説明とさせていただきます。

（林）　大塚先生、どうもありがとうございました。

それでは、これから基調講演に移ります。講演をお願いしているのは、大学評価・学位授与機構の機構長であります木村孟先生です。

簡単にご紹介しておきますと、木村先生は、昭和40年からずっと、東京工業大学でファカルティとしての長いキャリアをお積みになって、その間に工学部長を平成４年からお務めになり、平成５年には東京工業大学の学長に就任されています。それからあと、学長のお仕事を終えられて、平成10年から学位授与機構の機構長として機構に移られ、その後、この学位授与機構が大学評価・学位授与機構に替わるということで、現在に至っておられます。現在、大変なお仕事である機構長をお務めになりながら、今、中央教育審議会の副会長もお務めになっている。そういう意味で、

高等教育に関して非常に重要なお仕事をされている先生でございます。

特に先生の場合には、高等教育に関する日英協力で中心的な役割を果たしてこられました。これは恐らく先生の、研究の領域にも及ぶのではないかと思いますけれども、イギリスをはじめとした欧米の高等教育やその評価の状況について、特に具体的に英国とは強い連携といいますか、役割を果たしてこられたということで、私も最近知りましたが、昨年は名誉大英勲章というのをイギリスからお受けになり、欧米を中心にした世界的な高等教育の状況及び、そこでの評価の問題といったあたりを大きなバックボーンとしながら、日本での大学評価のお仕事に邁進しておられます。大学のほうから見ております我々の感覚でいうと、日本でこうやって進んできている大学評価の当初からの頭目がここにいらっしゃるという印象を持っているわけですけれども、今日はむしろ、その辺のご苦労を中心にしてきたんのないお話を聞かせていただければと思っております。

それでは、どうぞよろしくお願いいたします。